

ロッキーとクリーム

芦沢美樹 / 作・絵



第 24 回 日本動物児童文学賞奨励賞受賞作

大人も子供も、そして動物もみんなストレスを持っています。
友達とケンカした時、やりたいことが思うようにできなかった時、
そして大事な人を失った時。もし心が折れそうな時があったら、
ぜひ手に取ってみてください。

ロ
ツ
キ
ー
と
ク
リ
ー
ム

「ママ、どうしてロッキーは水の中をグルグル回ってばかりいるの？」
「きつと退屈なのよ」

ぼくもだれかに同じことをききたかった。でも一人で動物園に来ていたし、知らない人にたずねる勇氣もない。だからこうして、ほかの人の話に耳をかたむけている。

それほどホッキョクグマのロッキーは何十回、いや何百回となく水中でバク転をくり返していた。何を考えているのか、ひたすら後ろ向きにターンをしている。まるで止まらなくなった洗濯機のようなだ。

このプールは一部がガラス張りになっている。だから水中めがねで見ているように、動物の動きを観察できる。お客さんのほとんどは、ロッキーの gorgeous な泳ぎを見て歓声をあげる。大きな動物を目の前にす

るだけで大迫力なのに、流れるようなあざやかなバク転はとても見ごたえがある。ターン中に大きな足の裏がガラスに「ペタッ」と張りつくともみんな大喜びだ。

でも、そのうちロッキーの止まらない動きを見て、あちこちからさつきの親子のような会話が聞こえてくる。

「そんなに回ってばかりいたら、そのうち体も心も溶けてなくなっちゃうよ」

ぼくは本気でそう思った。

初めてロッキーに会ったのは小学三年生ときだ。その年の春、忘れたくても忘れられない悲しいできごとがあった。

三月の初めだった。その日は父さんと母さんと三人で「河津桜まつり^{かわづざくら}」に出かけていた。県内にある河津川沿いで行われるお花見のイベント

だ。毎年二月から三月にかけて行われている。河津桜はテレビでよく見る桜より、一か月ぐらい早く咲くためだ。

父さんの運転する車が河津川に近づくのと胸がドキドキした。目の前がどんどんピンクに染まっていく。桜の花は満開だった。桜の木の根もとには菜の花もたくさん咲いていた。河津桜はほかの桜よりもピンクの色が濃い。川の土手を、濃いピンクと黄色がえんえんと続いている風景は本当にきれいだった。ぼくらはちよつと早めの春を思いっきり楽しんだ。

帰りにレストランで食事をして、東名高速に入るとあたりはもう暗かった。車は渋滞に巻きこまれることもなく、順調に走っていた。

「あんなにたくさんさんの桜を一度に見たことはないわ。まるでピンクのじゅうたんね」

「うん、桜は白っぽいイメージがあるけど、ああいう色もいいね。女性

が好きそうな色だよな」

前の席で父さんと母さんが楽しそうに話をしている。そのときだった。前を走っていた大型トラックのライトが突然目の前に迫ってきた。急ブレーキをかけたけれどおそかった。次の瞬間、ものすごい衝撃がぼくらをおそった。

目が覚めたとき、そこが一体どこなのかわからなかった。となりに赤く目をはらしたおばさんが座っている。なぜ父さんや母さんでなくおばさんがそこにいるのか、しばらく天井を見つめて考えた。でもわからない。おそるおそるきいてみた。

「おとうさんとおかあさんは？」

おばさんはしずんだ様子で口を開いた。

「直斗君、なおといい？　しっかり聞いてちょうだい。お父さんとお母さんは

ね……もう遠くに行ってしまつて、ここにはいないの」

ぼくらの車は東名高速の玉突き事故に巻きこまれた。そして、前を走っていた大型トラックに正面衝突した。車はメチャメチャにつぶれ、すぐに救急車が来てぼくらを病院に運んだ。でも、父さんと母さんは助からなかった。後ろの席にいたぼくだけが軽いけがですんだ。

話を聞いて頭の中がまっ白になった。悪い夢を見ているのだと思つた。脳みそが何かに破壊されたように、ポロポロくずれていく。頭をさわつた。夢じゃない。

「ワアー、ワアー！」

突然ライオンのような叫び声をあげた。そして両手で頭をかかえて、そのままベッドにうずくまつてしまった。



病院には一週間入院した。そのあとはおばさんの家に引き取られることになった。

おばさんは父さんのお姉さんで、となりの町で一人暮らしをしていた。ずっと前にだんなさんを病気で亡くして、子供もいない。長い間病院で働いていたけれど、年をとったのでそれから仕事をしなくて家にいる。

おばさんは世話好きでやさしい人だ。昔から遊びに行くたびに大歓迎をしてくれた。おいしい料理をふるまい、帰りにはたくさんのおみやげを持たせてくれた。

多分、おばさんはもともと責任感が強い人なのだと思う。でもぼくを引き取ることを、本当に迷わなかったのだろうか。たまに遊びに来

る子を歓迎するのとはわけがちがう。子供をあずかる責任は、はかることができないほど重いと思う。それでもおばさんは引き受けてくれた。ぼくがそのありがたさに気づくのは、もう少し先のことになる。

ぼくは事故を思い起こさせるものからは、ことごとく目をそむけるようになった。たとえばテレビや新聞だ。毎日交通事故のニュースを報道している。そのほかトラックや高速道路、救急車、三月のカレンダー、桜、ピンクという色。あげ出したらきりがない。

うっかり目に入ると、たちまちあのとときの光景が頭の中によみがえる。耳がツーンとして、それ以外のものが目に入らなくなる。そして体がヘビのぬけがらのようになってしまう。この世に生きている気がしなくなつて、心だけが宙をさまよっているような感じだ。

いくら努力してこれらの思い出をふりはらおうとしても、やつらは

しつこく追いかけてくる。そう簡単には逃げられない。事故以来、毎晩のように桜まつりの夢を見る。それも楽しい場面ばかりだ。なぜかとちゅうで目が覚める。そのときの空しさと言ったらない。バケツで水をかけられたように、悲しい現実にあたきつけられる。もう一度目をつぶってねむると、今度は事故の夢に変わる。自分の悲鳴でまた目が覚める。

毎日、生きた心地がなかった。何をやっても楽しくないし、将来に向けて希望も持てなかった。学校や友だちことにも関心がなくなつて、外に出るのもおつくうになった。そんな状態をひどく心配したおばさんは、ぼくを心療内科の病院に連れて行った。診察した先生は、ぼくにあれこれたずねると最後にこう説明した。

「お子さんにはPTSD ピーティーエスディ の症状が認められます。PTSDというのは しんてきがよいしょうご 心的外傷後ストレス障害と言って、怖い思いをした記憶が心に傷となつ



て残り、それが原因でさまざまなストレス障害を引き起こします」

おばさんは熱心に先生の話を聞いていた。ぼくはわざと平気なそぶりをした。でも本当は、不安で叫びそうになる自分を必死でおさえつけていただけだ。

公園の木が赤や黄色に色づいてきた。半年たってもぼくの症状はなかなか良くならなかった。何に対しても無気力無関心なまま、ただ時だけを過ごしていた。学校にはなんとか通っていた。でも、一生懸命勉強したり、進んで友だちを作ったりすることはなかった。

おばさんは少しでも良くなればと、動物園に行く計画を立ててくれた。本当は気乗りがしなかった。特に動物好きでもないし、にぎやかな場所に行くを取り残されたような気分になる。考えれば考えるほど気持ちがいそいだ。でもおばさんがわざわざ計画してくれたことだ。

意を決して行くことにした。

「直斗君、したくはできた？　動物園行のバスは混むから早くした方がいいわよ」

「うん、とつくにできてる。今すぐ降りていくよ」

一階にいたおばさんの呼びかけに、無理に元気をよそおって答えた。

順路通りに動物を見て、最後のコーナーまで来た。寒い地域で生息する動物ばかりが集まったコーナーだ。歩き疲れて集中力もなくなってきたところだった。

なにげなくながめた先に、いきなり目がくぎづけになった。そこにはフカフカしたぬいぐるみのような白い動物がいた。しきりにボールを追いかけて楽しそうに遊んでいる。まだ子供で体も小さい。コロコロと動き回る姿がものすごく可愛い。

あまりの可愛さに思わず顔がほころんだ。そのとき、急に目の前がパツと明るくなったような気がした。コンクリートのように固まっていた心が「ガタン」と動いたのがわかった。これがロツキーとの初めての出会いだった。

ロツキーはオスのホツキョクグマだ。ロシアの動物園で生まれ、半年間家族といっしょに暮らしたあと、日本の緑山動物園へやってきた。この動物園では前の年に死んだホツキョクグマの代わりをさがしていた。そんなところへ、ロシアの動物園から赤ちゃんをもらえるという話があった。

それがロツキーだった。ロツキーにしてみれば、こんなに悲しい話ではなかったのかもしれない。親にあまえたいさかりのときに、たったひとりで遠い外国へ行くことになってしまったのだから。

ぼくは吸いこまれるようにロツキーを見続けていた。どうも担当の飼育員の人が好きらしい。その人の行くところ行くところ、ずっと目で追っている。そして、できるだけそばに寄ろうと放飼場のあちこちほうしじょうを移動している。飼育員の人がいなくなると、立ち上がったて遠くをさがす。いくら待ってももどつてこないと、あきらめたようにおもちゃで遊び始める。再び現れたときは、体を大きくゆすつて、うれしさを全身で表現する。

ホツキョクグマがおもちゃで遊ぶことでさえおどろいていた。なのに、人間を意識している行動を見たら、もっと目がまん丸くなった。ロツキーは飼育員の人に対して、明らかに自分の気持ちを伝えている。すごいと思った。

「ねえおばさん。あのシロクマって、飼育員さんのこと本当の親みたい

に思ってるよね」

「そうね。人間に心を開くなんてびっくりね。きつと人間と会話ができるのよ」

もちろん話せるわけがない。何か特別な能力でもあるのだろうか。それにこんなに早く新しい環境に溶けこんでいるのも、不思議と言えば不思議だ。ぼくは寝場所が変わるだけでよくねむれなくなる。いろいろ考えているうちに、ロッキーのことがうらやましくなってきた。たった数時間ですっかりロッキーにひきつけられてしまった。

帰り道、はずんだ声でおばさんにお礼を言った。

「おばさんありがとう。今日動物園に来て本当によかったよ」

「直斗君がなんだか急に明るくなったみたい。おばさんも本当によかった」

夕日に照らされたおばさんの横顔に、涙がきらつと光っていた。



それから日曜日のたびにロッキーに会いに行った。動物園は自転車でも二十分ぐらいのところにある。中学生以下は入場料が無料なのも助かる。心配するおばさんを必死で説得して、なんとか一人で行くことを許してもらった。日曜日が楽しみでたまらなくなった。

ロッキーはプールで遊ぶのが好きだった。もともとホッキョクグマは泳ぎの得意な動物だ。ロッキーもいつ覚えたのか、魚みたいに上手に泳いだりもぐったりした。そのほか飛びこみや水中ターンのわざも身につけていた。

飼育員の人は、ロッキーにいろいろな遊び道具をあたえた。ガスパンとして土の中にうめて使うポリエチレン製の黄色いつつ、海上の目じるしに使うオレンジのブイ、道路工事や交通整理などで使う三角コーン、灯油などを入れるポリタンク。どれも人間が仕事で使うようなもののばかりだ。でもロッキーの前ではかっこいいおもちゃに変身した。

ロッキーはおもちゃの遊び方を考え出すことも得意だった。おもちゃを思いきり投げてから追いかけたり、あお向けになって手足の裏でころがしてみたり、かぶったり、手に通してみたりと数え出したらきりがない。本当に遊び上手だった。

ロッキーのやんちゃぶりは新聞やテレビでたちまち評判になった。大勢の人がひと目見ようと動物園に行った。コロコロとしたぬいぐるみのような子グマが無邪気に遊ぶ姿は、あつと言う間にみんなの心をうばった。ロッキーもそれに答えるかのように、元気な姿を見せてはみんなを喜ばせた。まるで生まれながらにして、人間の心を読みとる能力があるかのようにだった。ロッキーの楽しそうな姿を見るたびに、ぼくは少しずつ元気を取りもどしていった。

事故から二年が過ぎ、また桜の咲く季節がやってきた。ぼくは小学五年生になった。冬のねむりから覚めた春の植物のように、ぼくはゆつくりと息を吹き返していた。

そのころ動物園では、数年前から進められていた工事が仕上げ段階に入っていた。動物園が始まってから約四十年たっている獣舎の建てかえがおもだ。完成すると動物達は新しい獣舎に引っ越すことになる。ロッキーも最新設備が整った建物に引っ越すことが決まっていた。「猛獣館」という何種類かの猛獣がいっしょに暮らす大きな建物だ。できるだけ動物たちのもとの環境に近づくように、工夫がされているそうだ。お客さんとの間には特別なガラスを入れて、目の前で動物を観察できるようにする。

猛獣館がオープンすると、一番乗りでロッキーに会いに行つた。春休みということもあつて、できたての建物は人であふれていた。

ホッキョクグマのコーナーは一階と二階をまたぐつくりになっている。だから、いろいろな角度から間近にロッキーを観察できる。中庭ふうの屋外放飼場は自然の岩場に似せて作られていて、プールには滝まである。ガラス張りのプールは、一階から見ると水族館にある水そうみたいだ。

さつそくロッキーを見つけた。プールでごうかいにバク転をしている。

「いたいた、元気でよかった。それにしてもすごい迫力だな」

ターンをするたびに目の前のガラスをけるので、足裏の肉球まではつきり見える。ロッキーとの距離はたったガラス一枚分だ。初めてこんな近くでロッキーを見た。あらためてその大きさにおどろいた。見る

たびに成長していくのはわかっていたけれど、こうしてまじまじと見ると自分の五倍ぐらいはある。

その夜、ベッドに入ってもなかなか寝つけなかった。ロッキーが無事に引越したことも、迫力満点の猛獣館にも感激はした。でも、ロッキーがプールでバク転ばかりしていたことが気になってしかたなかった。

一度本で読んだことがある。動物が同じ動作を何回もくり返すことを「常同^{じょうどう}行動」と言って、たまったストレスを発散するときにも見られるそうだ。古いプールのときも時々バク転はしていた。でも、猛獣館に来てから回数が増えているような気がしてならない。ロッキーがなかなか新しい環境になじめずにいるんじゃないかと思った。そして、それが原因で大変なことが起きてしまうような気がした。

悪い予感は当たった。ロッキーは動き回り過ぎて足裏の肉球を痛めてしまった。猛獣館に引越してからたった一か月だ。ザラザラした岩のような階段を何度もかけおりたことが原因だと言う。バク転が直接の原因ではないらしいけれど、心配なものには変わらない。足の裏から血が出ているそうだ。ぼくもよく転んで足をすりむく。だから大したことがないようにも思う。でもちがう。傷口からばいきんが入ると死んでしまう場合だってある。

ロッキーはしばらく休養することになった。その間は会うこともできない。休養中は寝部屋で静かに過ごすらしい。飼育員の人遊び相手をするそうだ。これだけはよかった。大好きな人と遊ぶ時間が増える。うれしいに決まっている。

学校にいても家にいてもロッキーのことが頭から離れなかった。これまでずっとロッキーに励まされてきた。勇気や明るさをたくさんも

らってここまで立ち直った。今度はぼくがロッキーを心配する番だ。「思うように動けなくてイライラしてないか？　いつもチクチク痛むんだろうな」

悪いことを想像しては、いてもたってもいられなくなった。できることなら自分と変わってあげたかった。でも、何もできない自分が本当にじれったい。心配をかけるより、心配をすることの方がつらいのかも知れない。おばさんの苦労がなんとなくわかった。

ロッキーは八十日間休養したあと、ようやく復帰した。季節はもう夏だった。長かった。ぼくにはこの八十日間が一年ぐらいに感じた。治りかけてはまた痛み、のくり返しだったそうだ。じっとしているのが苦手なロッキーらしい。

復帰のニュースを聞くと、すぐに様子を見に行った。屋外放飼場の

階段は傾斜がゆるやかになり、表面はなめらかに塗りかえられていた。ロッキーはけがをしたのがうそのように元気に遊んでいた。気持ち良さそうに泳いだり、勢いよく走り回ったりしている。

「おい、そんなに動き回るとまた傷口が開くぞ」

元気な姿を見て逆に心配になった。それに、水中バク転もあいかわらずだった。今日もグルグルグルグル回っている。ただの運動なのか、それともストレスがたまっているのか。いつまでたっても不安が消えることはなかった。



四

次の週、家の近くにある図書館に行った。「ホッキョクグマの生態」の本を借りるためだ。ロッキーのくり返しの行動が少しでも解ければと思った。むさぼるように本を探した。何冊かあったので、カウンターに持って行こうとしたときだった。物語のコーナーで本を探している女の子に目がとまった。帽子をかぶっているけれど見おぼえがある。パッチリした目にすつとした鼻、それに細めの体型。よく見ると五年三組の小早川美帆だ。こばやかわみほ

彼女とは三、四年のときにクラスが同じだった。勉強も運動もできる優等生だ。学級委員をやったり、読書感想文コンクールで表彰されたり、なにかと目立つ存在だ。ただでさえ無口なぼくは、人気者の彼女と話す機会は一度もなかった。

五年生になってクラスが別々になった。友だちの多い彼女はクラスがちがっても目立っていた。ところが二か月ぐらい前から急に見かけなくなった。学校では「心の病気で入院した」なんていう噂が広まっていた。

「入院してたわけじゃなかったんだ」

そう思いながらその場を立ち去ろうとした。ところがそのとき、またま横を向いた彼女と目が合ってしまった。彼女もまずいところを見つかったという顔をしている。逃げる理由もないのでぼくは近寄って彼女に話しかけた。

「あれ、小早川さんも図書館に来るんだ」

彼女はうつむきかげんで口を開いた。

「うん、たまにね。杉浦君、今だれかといっしょ？」

「ううん、一人だよ」

ホツとした様子だ。

「あたしとここで会ったことだれにも言わないでね」

「ああいいよ。最近学校で見ないけど、たまたま会わないだけ？」

彼女は一瞬だまった。

「……ちがう。あたし二か月前から学校に行ってないの」

「えっ！ 学校休んでたんだ」

大げさにおどろいたふりをした。学校で噂されていることは言わない方がいいと思った。そしてわざと軽い調子でたずねた。

「体調でもくずしてたの？」

「まあ半分当たってるかな。うまく言えないけど学校に行きたくなくなっちゃった」

「よくわからないな。だって小早川さんは優等生でクラスの人気者だろ。行きたくない理由なんてどこにもないと思うけど」

「だからね、そういう状態にいることに疲れちゃったの」

その言葉には、彼女の苦しい叫びがこめられているような気がした。彼女は学校に行けなくなった理由を、自分から話し始めた。ドキっとした。まさかぼくなんかこんな大事な話を打ち明けるなんて、思ってもみなかった。

「うちの両親ってね、昔からバカみたいに厳しいの。あれしなさい、これしなさいって口うるさいったらない」

「でもそれってしつけだろ。どこの家の親もそうだと思うよ」

「どうかな。今まではそれが当たり前だと思ってた。勉強も運動もできなきゃダメとかね」

「へえ、だから小早川さんってなんでもできるんだ」

「そんなことない。それにもう親の言う通りにするのはうんざり」

「きつと自分ちの子が心配でしようがないんだよ」

「とにかくもう疲れたの。自分のペースは自分で決めたい」

彼女は興奮した様子で気持ちをぶちまけた。

「うーん、よくわからないんだけどさ、本当にそれが学校に来られなくなった理由？」

「きっかけは少しちがう」

「あーごめん。話したくなければ話さなくていいよ」

それでも彼女はためらうことなく話を続けた。

「いいの。優香^{ゆうか}と菜緒^{なほこ}子知ってるでしょ、四年生のおとぎにあたしと仲の良かった」

「ああ、いつも三人いっしょだったよな」

「クラスがえでもいっしょになったの。すぐくうれしかった。でも二か月ぐらい前から、急にあたしをぬかして二人だけで話すようになった」
「気のせいかもしれないよ」

「ううん、思い切って二人に理由をきいてみたの」

「そしたらなんて？」

「いっしょに遊ぼうと思っても、あたしがいつも忙しくて断るから、二人だけで遊ぶようになったって。交換日記もやってるって言ってた」

彼女は今にも泣き出しそうだ。

「そんなに忙しいんだ」

「うん、五年生になってから塾の時間が増えてる。親があたしを私学の中学に行かせたいみたい」

「ふーん、大変だね。で、仲間外れにされたと思ったのが原因？」

「そういうわけじゃないけど……なんだか本当はみんなに陰口を言われているような気がして。それで学校に行くのが怖くなっちゃった」

「女子ってめんどくさいよな。つまらないことでもすぐ陰でコソコソ言うし」

なぐさめたつもりが失敗だった。これじゃ本当に陰口を言っているみたいだ。彼女の目から涙があふれてきてしまった。

彼女の言葉は意外だった。彼女ほどの優等生にこんな弱い部分があるなんて思わなかった。いつも大人っぽく見えた彼女が、急に小さな子供みたいに見えた。そのとき何を思ったのか、ぼくは突然こんなことを口走ってしまった。

「今度の日曜日、いっしょに動物園に行かないか？」

「えっ、なにしに？」

彼女はわけのわからないような顔をした。

「ホッキョクグマを見にさ」

次の日曜日、二人で動物園へ行くことになった。朝九時に近くの公園で待ち合わせた。



約束の時間にまだ十五分もあるのに彼女はもう来ていた。ピンクのTシャツを着て、ひざ丈のジーンズをはいている。すらりとした彼女には良く似合っていた。

「おはよう。家の人に反対されなかった？」

「全然！　いつもの調子で『ダメ！』って言うかと思ったら、なんか涙流しそうに喜んでんの、バカみたい」

つつぱった言い方が、逆に機嫌の良さを強調していた。この前会ったときよりもずっと明るい。

動物園に着くと、ぼくらはまっすぐロッキーのところへ行った。ロッキーはちょうどプールでバク転をしているところだった。あいかわらず水中をグルグル回っている。

「あれがロッキーだよ。大きいだろ」

「うん、すごい迫力。初めて見たけど感動！」

「ここに来てからだいぶ大きくなったんだ。今じゃ体重が三百キロぐらいあるんだって」

「へえ、すごい。きつとたくさん食べるんだ」

「うん、この動物園で一番えさ代がかかるらしいよ」

「ふーん。それはそうと、さつきからずっと回ってるけど大丈夫？」

彼女も同じことを気にしていた。

「ぼくも前から心配してる。本で動物のストレスのことを読んでから特
にね」

「ストレス？ それって『ストレスたまる』のストレス？ 親が疲れた
ときによく使うけど」

「うん、そうだけど……でも大体ストレスってなんだ？」

自分から言っておきながら、ストレスの意味をうまく説明できない。
かつこ悪かったけれど、逆に彼女に質問した。

「よくわからないけど糸電話の糸みたいなものかも」

すぐにそう答えた彼女は、やっぱりもとの優等生のままだ。

「糸電話？」

「そう、理科の時間に作ったでしょ。紙コップとタコ糸で」

「うん、でもあの糸のどこがストレスなんだ？」

「糸がぴんと張っていないと相手に声が届かない、でも張り過ぎると切れちゃう」

なんだかむずかしいことを言い出した。

「そうだね、確かに糸がゆるむと声が小さくなったり聞こえなくなる」

「これをストレスに当てはめるの。片方のコップが心、もう片方が体、それをつなぐ糸がストレスっていうふうに」

「なんか本当にむずかしいね、こんがらがってきたよ」

話についていくのがやっとだ。

「じゃあ、体の具合に置きかえてみて。緊張するとトイレに行きたくなるよね。反対に気がぬけると体がダラケちゃう。でも、ストレスの糸をバランス良く張ってれば心と体も調子いいでしょ」

「なんとなく感じはつかめたよ。さすが優等生、たとえばちがう」

彼女が少しむっとしたので、あわてて話をもとにもどした。

「もしロッキーのストレスが張り過ぎているとしたら原因はなんだろう？」

「うーん、よくわからないけどさびしいのかも。ロッキーはさびしさをなにかでまぎらわしてるんじゃないかな」

彼女の話はむずかしいけれど、とても説得力があった。心や体の不調を「さびしさ」と結びつけるのは、自分がそういう思いをしたことがあるからだと思う。彼女は自分を冷静に見つめている。そして自分の弱さをしっかり認めている。ぼくはそんな彼女にいつの間にかひき

つけられていた。



それから時々二人で動物園に行った。いつしよにいる時間はとても楽しかった。ドキドキもするけれど、ありのままの自分で行うことができた。居心地のいい状態とはこういうことを言うのだろう。彼女ふうに言えば「ストレスがバランス良く張っている状態」だ。

ぼくらはおたがいのことをよく話すようになった。自分のことや自分のまわりのこと、なんでもかんでも話した。悩みも打ち明けた。そして気持ちに通じ合うことがあると、そのたびに感激した。彼女といる時間はとても充実していた。

彼女を初めて家に招待したときの話だ。

ぼくから彼女のことを聞いていたおばさんが、ある日突然こんなことを言い出した。

「今度動物園の帰りに美帆ちゃんを家に連れて来なさいよ。おいしいパウンドケーキ作るから」

「えっ！ 困るよそんなの」

ぼくがいやと言うよりも、彼女がいやがるんじゃないかと思った。ところがおばさんはあきらめなかった。しかたがないので誘ってみることにした。そしたらなんのことはない。彼女は大喜びでオーケーした。

動物園から帰ると、おばさんは本当にものすごくおいしそうなケーキを焼いて待っていた。

「あら、いらっしやい。美帆ちゃんね。よく来てくれたわ」

「初めまして。小早川美帆です。直斗君にはいつもお世話になってます」

礼儀正しいあいさつが、いかも彼女らしい。リビングに案内すると、

おばさんがケーキと紅茶を運んできた。ぼくらはまだ温かいケーキをペロツと平らげた。

「このケーキ本当においしいです」

「あらそう、喜んでもらえてよかったわ。また焼いてあげるからいつでも遊びにいらっしやいね」

「ありがとうございます」

次にぼくの部屋に案内した。

「うわあ、片づいてる。杉浦君ってすごくきれい好きなんだ」

「そんなことないよ。いつもはもっと散らかってる」

昨日夜までかけて片づけた。彼女は整った部屋を見回しては感激している。そして、本棚の中にある小さな木箱を指差して言った。

「かわいい！ あれはなに？」

「ああそれ？ オルゴールだよ」

木製のオルゴール箱だ。全体がうすいピンク色で塗られていて、ふたの部分に桜とハートの絵が描かれている。ぼくは本棚からオルゴールを取り出すと机の上に置いた。

「開けてもいいよ」

彼女は目をキラキラさせながらゆつくりとふたを開けた。同時に中から写真立てが起き上がってきた。そして、その中の写真を見てドキツとしたようにつぶやいた。

「これって……」

「そう、死んだ父さんと母さん。仲良さそうだろ？ このオルゴールは新婚当時に二人が記念に買ったものなんだ。今じゃ形見になっちゃったけどね」

たちまち彼女の顔がくもった。ぼくはあわてて本棚からもう一つ木箱を取り出すと、明るく言った。

「オルゴール聞いてみる？」

「うん、聞きたい。その大きい箱はなに？」

あとから出した木箱は、大きさも形も百科事典のケースに似ている。厚さ一センチぐらいのかたい木できていて、ふたも取っ手も無い。

ただの長方形の箱に見えるけれど、一つの面だけが開いている。

「これ共鳴箱きようめいはこ。漢字で『ともになくはこ』って書くんだ」

「きょうめいはこ？ 初めて聞くけど、なんに使うの？」

「オルゴールをこの箱に乗せて聞くと、音が大きくなって、しかもいい音になるんだ。音はここから出てくるよ」

ぼくは開いた面を指さした。

「えーっ！ うそでしょ？ 本当にそんなドラえもんのポケットみたいな箱があるわけ？」

疑ってかかっている。

「ちよつと待つてろよ」

ぼくはオルゴールを裏返してぜんまいを巻くと、ゆつくりとふたを開けた。オルゴールからは「星の願いを」という曲がポロポロと流れてきた。これだけでもじゅうぶんきれいな音だ。次にオルゴールを共鳴箱の上に置いた。すると、急にステレオのような音に変わった。低音が響いて、音も大きくなった。

「すごい、この箱に乗せただけで魔法みたいに音が変わった」
ぼくはちよつと得意気になった。

「だろ？　オルゴールから伝わった空気の振動が、共鳴箱の中で押しやり押し返されたりして共鳴してるんだ」

「きょうめいつてなに？」

「はね返って、こだまみたいに響くことだよ」

「山の頂上で『ヤッホー』って言うのと、『ヤッホーヤッホーヤッホー』っ

ていつまでも聞こえるあれ？」

「そう。音が小さな箱から大きな箱に伝わって共鳴すると、エネルギーが何倍にも増える。だから、音が大きくなったたりよく響いたりするんだ」
「ふーん、むずかしくてよくわかんないけど、小さい箱に指揮者がいて、大きい箱にいる小鳥達がそれに合わせて合唱してるみたいな感じ？」
「うーん、ちよつとちがうかな。でもまあいいや」

答えに困ってごまかした。えらそうなことを言わなければよかった。でも、本当にオルゴールの音は小鳥の合唱と言ってもいいくらい、素晴らしいものに変化していた。



半年が過ぎた。梅雨が明けて、うだるような暑さが続いていた。

ある朝おばさんが新聞を片手にニコニコしながら言った。

「直斗君、ニュースよ。ロッキーにお嫁さんが来るんだって」

「えっ！　だってロッキーってまだ三才だよ、子供じゃん」

「ええ、だからいきなり結婚ってわけじゃないわ。まずお見合いをするの。そして気が合えばそのままいつしよに暮らすらしいわ。将来赤ちゃんができればみんな大喜びね」

新聞をくわしく読んだ。ロッキーのお嫁さん候補はクリームという名前で、来月にも日本に来るそうだ。タイのバンコク動物園生まれで二才半、ロッキーの一つ年下だ。体格もロッキーの半分ぐらいらしい。ワクワクというよりホツとした。結婚がどうこうよりも、ロッキーに

友だちができることがうれしかった。

暑さもようやく峠を越したころ、ついにクリームが緑山動物園にやって来た。十五時間の空の旅はさぞ疲れたことと思う。でもなんとか無事に着いてひと安心した。

ところが、ホツとしたのもつかの間だった。クリームは到着直後からろくに食事を取っていないらしい。新しい環境になじめずに、室内展示室にこもりつきりだそうだ。もともとホツキョクグマは、見かけによらず神経質だと言われている。これではロツキーと結婚するどころか、お見合いもむずかしくなってきた。

夏休みの終わりに、ぼくらはまた動物園に行った。クリームに当分会えないことは知っていたけれど、まっすぐ猛獣館に向かった。

「クリーム早く元気になるといいね。ふたりいっしょのところを早く見

たいな」

彼女は大人びた口調で答えた。

「こういうときは、まわりがザワザワさわいじゃダメ。そつと見守ってあげるのが一番」

「じゃあ、落ち着くまでじっくり待つしかないね」

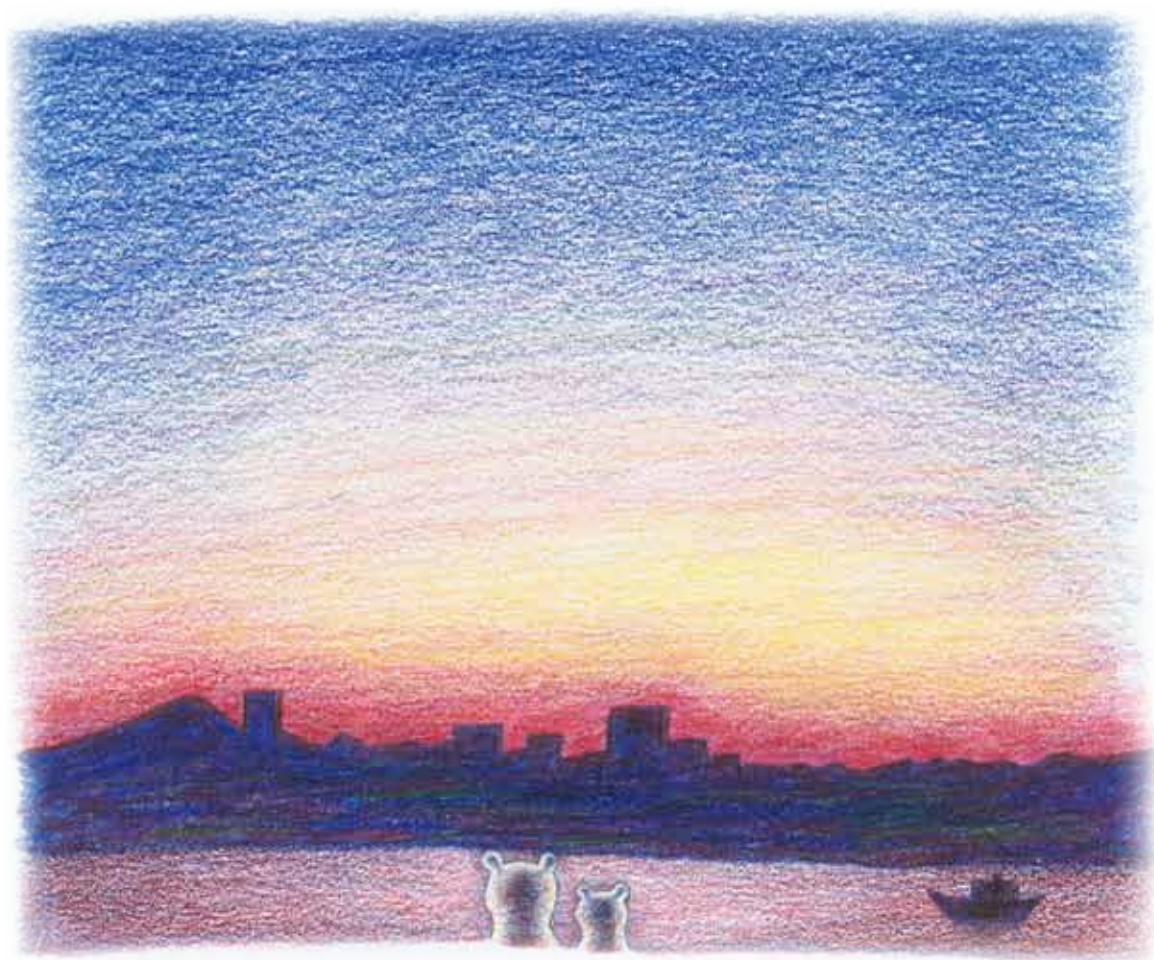
「そう、時間をかけてゆっくり心をほぐしていくの」

彼女自身のこととはどうかと言うと、少しずつ元の明るさや自信を取りもどしていた。そして夏休み明けにはまた学校に通い始めた……かのように見えた。ところが、復帰早々思いがけない事態が起きた。

再登校初日の夜、彼女から電話があつた。

「どうだった？ 少しはだれかと話せた？」

「それが……朝一番に教室に行ったけど、みんなが来る前に帰ってきた」



「えーっ！ どうしたんだよ。なにかいやなことでもあったの？」

「教室に入ったら、黒板いっぱいアイアイ傘が書いてあったの。傘の中にはあたしと杉浦君の名前があつて、ハートのマークまでついてた」
彼女の声が急に裏返った。どうも電話の向こうで泣いているらしい。
「そんなの気にすんなよ。きつとただの冗談だよ」

多分ぼくらを見かけたやつが冷やかし半分で書いたものだろう。昔の彼女だったら軽く笑い飛ばしたにちがいない。でもそのときの彼女に、まだそんな余裕はなかった。彼女はまた学校へ行くことができなかった。せつかく開きかけた心のドアを、再び「ピシヤッ」と閉めてしまった。

でも不登校になつたわけじゃない。どういうことかと言うと「保健室登校」だ。簡単に言えば、学校には来るけれど、教室に行かずに保健室で過ごすことだ。不登校の子が教室に復帰する前に、この方法を

取ることがある。保健室には時々先生やほかの子も来る。その人と話をすることで、教室にもどりやすくなるらしい。

できることなら直接会って彼女を励ましたかった。今までのようにいろんなことを話したり、悩みを聞いてあげたりすれば、少しは元気になるかもしれない。でも問題があつた。だれかに見られたら、またクラスで冷やかされる。そうなれば事態はもつと悪くなる。学校で話をするのは絶対にやめた方がいいと思つた。

「じゃあ、どうしたらいいんだよ」

ベッドにあお向けになつて、天井を見つめながら必死に考えた。視線をおろして本棚に目をやったとき、あることがひらめいた。

「そうだ！　これだ」

次の日、手に大きな紙ぶくろを下げて、いつもより三十分早く登校した。学校に着くとそのまま保健室に行った。養護の先生はもう出勤

していて机に向かっていた。紙ぶくろの中から大きな木箱を出すと、それを持って先生のところへ行った。

「おはようございます。五年一組の杉浦です。三組の小早川さんのことなんですが、ぼくのことと教室に来られないって聞きました。できたらこれを小早川さんにわたしてもらえないでしょうか。絶対に勇気が出ると思います」

そう言つて共鳴箱を見せた。必死だった。緊張したけれど、昨晚何回も練習したセリフは大体言えた。

「大丈夫だからまずは落ち着いてちょうだい。よかったら最初からくわしく話してくれない？」

ぼくは先生に、彼女と図書館で会ったときのことから、動物園によくいっしょに行ったこと、悩みを打ち明け合ったり、いろんなことを話したりしたことなどを、一部始終話した。そして、この共鳴箱の使

い方も説明した。

「この箱に音の振動が伝わると、それがこだまして音が何倍も大きくなるんです。本当はオルゴールを乗せて使うものですが、今日は小早川さんへのメッセージをたくさん入れてきました」

先生はなんのことかわからないといった顔をして共鳴箱を見た。箱の入り口からは、半分に折られた小さな紙がたくさんのもぞいていた。

「読んでもいい？」

「はい」

先生は紙を数枚取り出すと、中を開いてメッセージを読み上げた。

「みんな小早川さんのことを心配してる、だれも小早川さんのことをきらってなんかない、小早川さんは一人なんかじゃない、小早川さんは弱虫じゃない……これって……」

「メッセージをこの箱に入れると何倍もの力で相手に届きます。小早川

さんはそのこと知っています」

先生の目が少しうるんでいる。

「わかったわ。必ず彼女にわたすわね」

来てよかった。安心したら急に時間が気になった。

「ありがとうございます。それじゃぼく教室にもどります」

「あつ、ちよつと待って。提案があるんだけどいいかな？」

「はい、なんですか？」

「もしよかったら、時々保健室に来て新しいメッセージを入れるっていうのはどう？」

計画になかった内容だ。少しの間だまって考えた。

「でもだれかに見られてまた小早川さんが冷やかされませんか？」

「大丈夫よ。今の時間だったらだれもこっちの校舎には来ないわ。箱はあそこのロッカーに入れておくから自由に開けても構わない。そうす

れば杉浦君の言葉がいつでも小早川さんに届くでしょ？」

よくよく考えればとてもいい案だった。

「わかりました。時々この時間に来ます」

はずんだ声でそう言うと、急いで教室にもどった。

ぼくは時々どころか、毎朝メッセージを届けに保健室へ行った。励ましの言葉はもちろんのこと、日常のささいなことから、つまらないジョークまで、彼女を元気づけられるようなものならなんでも書いた。



ボーッと夕方ニュース番組を見ていた。政治のニュースから話題が変わって、アナウンサーが急に笑顔で話し始めた。

「緑山動物園のロッキーとクリームがお見合いを開始しました。これまでクリームは新しい環境になかなかなじめずに、一か月半もの間、ものを食べない状態が続きました。ところがようやく食欲がもどって元気になる、ロッキーとの初対面を果たしました。二頭は……」

ハッとした。テレビを食い入るように見つめた。画面には、対面の様子が映し出されていた。二つの寝部屋のしきりには、鉄格子がうめこまれた一メートル四方のぐらゐの窓がある。二頭が同時に別々の寝部屋に入ると、そこからおたがいの姿を目で確認することができる。

とびらが開けられた。いよいよ対面だ。ぼくは息を飲んだ。二頭は

警戒しながらそろりそろりと入ってきた。ロッキーもクリームもおっかなびつくりしている。しばらくすると、鉄格子をはさんでおたがいの存在に気がついた。二頭とも遠くの方から相手の様子をうかがっている。クリームが部屋のすみに移動した。と思った瞬間、クリームがものすごい勢いで鉄格子に飛びついた。ロッキーに対する威嚇だ。ロッキーはおじけづいて、とびらの向こうまで後ずさりしてしまった。

「やれやれ、お前男じゃないか。女の子におどされてどうするんだ」

いきなりこれだ。でも、考えてみれば無理もない。クリームは二年半も家族といっしょに暮らしてきた。一方ロッキーは生後半年で親兄弟と離れて日本に来た。それ以降ほかのホッキョクグマを見たことがない。これじゃ先が思いやられるはずだ。

「おい、ロッキー、勇氣出せよ。ゆっくりでいいからな」
いのるような気持ちでつぶやいた。



二か月がたち、木枯らしが吹く季節になった。クリスマスのかざりが街に明るさをそえていた。

彼女はついに教室に復帰した。立ち上がって、自分の足で一步前に進んだ。逃げなかったし、あきらめもしなかった。

同じころ、ニュース番組でまたロッキーとクリームのお見合いを特集していた。前回ロッキーがクリームに威嚇されてタジタジになって以来、なんの進展もないと思っていた。でもちがった。画面にはびつくりするような映像が流れていた。

ロッキーがにんじんをくわえて、鉄格子越しにクリームにわたそうとしている。クリームが顔を近づけてそれを受け取る。すると、今度はクリームが自分の肉をくわえてきてロッキーにわたしている。二頭は五センチぐらいの鉄格子のすきまから、おたがいに食べものをプレ

ゼントし合っているのだ。

「おいおい、なんだよなんだよ。いつの間にそんなに仲良くなったんだよ」

信じられないような光景だ。まるで映画のワンシーンみたいだ。出来過ぎだと思ったくらいだ。テレビ局の人もおどろいたにちがいない。画面には「ロッキークリーム決定的瞬間」なんてタイトルが映っていた。年が明けてさらにうれしいニュースがまいこんだ。

「ロッキーとクリームが同居訓練を開始しました。昨年秋からお見合いを重ね、時間をかけておたがいの気持ちを確かめ合ってきた二頭ですが、ついに同居に成功しました」

アナウンサーが目を細めながら語っている。同じ部屋に初めて二頭が入る瞬間だ。緊張が走る。

「よし、とりあえずふたりとも入った。いいぞいいぞ」

食べものを分け合っていたときのような、なごやかな展開を期待した。ところが、どういうわけか二頭はすぐに取り組み合いのけんかを始めてしまった。おたがいに相手の首根っこをかみつこうとしている。「おい！ いきなり攻撃か？」

でも心配する間もなく、アナウンサーが説明した。

「けんかをしているように見えますが、これはじゃれ合っているだけです。『甘がみ』^{あま}と言って本気で相手をかんでいるわけではありません」

「心臓が止まるかと思った。とりあえず同居は成功だ」

テレビに向かってVサインした。

数週間後には、ロッキーとクリームの屋外同居訓練が一般公開された。自分のことのように喜んだばかりは、まっ先に動物園へかけつけた。そこで目にしたのは、これ以上無いくらい楽しそうに遊んでいるロッ

キーとクリームだった。いっしょにプールに入ってバシャバシャ泳いでいる。二頭がはじく水しぶきに光が差してとてもきれいだ。相手からみついてはいっしょに水中にもぐり、また顔を出してはからみついている。よっぽど楽しいのだろう。

二頭は時々陸上に上がって休けいをした。そのときも体をすり合わせたり、顔をくつつけたりしている。どちらかが陸上に上がれば、もう一方も上がり、どちらかがプールに入れば、もう一方も入る。何をするにもくつついてばかりだ。こう言ってはなんだけれど、とてもうらやましい。

「きゃー、信じられない、あのふたりラブラブ。こっちが焼けてきちゃう」「あのロッキーの顔見ろよ。にやけっぱなし」

うそじゃない。本当にロッキーは笑っていた。ホッキョクグマは楽しいとき、人間がするような笑顔になるってこと初めて知ったくらい

だ。

ぼくらはそれからもずっと二頭を見ていた。ロッキーは何をするにもクリームを気にしている。ロッキーがクリームにいろいろなことを教えてあげているようにも見える。階段をのぼるとき、前を行くロッキーが後ろのクリームをいちいちふり返る。得意の高飛びこみをするとき、クリームがちゃんと見てるか確認する。クリームにしても同じだ。何をするにもいちいちロッキーを見上げ、そしてロッキーのそばに行く。二頭はおたがいを意識し合って行動している。

とにかくぼくらが帰るまで二頭はずっといっしょだった。そして、その間ロッキーは一度も水中でバク転をしなかった。

帰り道、彼女が少しあらたまった調子で言った。

「ねえ杉浦君。本当にありがとう。あたし杉浦君のおかげで何倍も勇気

が出た」

「そんなことないよ、ぼくの方じゃない。小早川さんが、がんばったんだ。あと……」

「あと……?」

「小早川さんがいないと、ぼくも元気が出ない。それじゃ困るんだ」
彼女は少し困ったような顔をしてうつむいた。そして小さな声で、

「……あたしもそう」

顔を赤らめながらはずかしそうに言った。あわてたぼくは急いで話を変えた。

「それはそうとさ、共鳴箱ってやつはドラえもののポケットだよな。なんでもかなう」

「うん、そうだよね。それと、ずっと思ってたんだけど、ロッキークリームのリームの寝部屋。あれってふたりの共鳴箱だと思わない?」

「えっ、どういうこと？」

「ふたりの鳴き声や息づかいがああの部屋の中でこだまして、気持ちに通じ合ったと思うの」

「そう言われてみればそうだね、まさしく共鳴箱だよね」

「でしょ」

「でも、もう共鳴箱はいらないよな。こんなに仲がいいんだから」

「ダメダメ、ケンカしたときに絶対必要！」

やっぱり彼女はしっかりしている。今度はぼくがタジタジになった。夕日がしずむころ家に着いた。満たされた気分で玄関のドアを開けた。

「ただいまっ！」

とびきり元気のいい声が家じゅうに響いた。



それから十五年の月日がたった。クリームはロッキーの子を八頭も産み、今でも仲良く緑山動物園で暮らしている。

ぼくは大学へ行つて医学の勉強をしたあと、心療内科の医師になり、今は市内の総合病院で働いている。結婚をして子供も一人授かった。

彼女は怎么样了かつて？

今、台所で夕食のしたくをしている。

「あなた、晩ごはんできたわ。今日はロールキャベツよ」

「ああ、すぐ行くよ」

夢なんかじゃない。本当にぼくの嫁さんだ。今、子供と三人で幸せな日々を送っている。ロッキーとクリームに負けなくらいだ。

本棚の中では、ピンクのオルゴールを乗せた共鳴箱が、退屈そうに

出番を待っていた。

完



^参考URL^

参考：「ホッキョクグマ」『静岡市立日本平動物園HP「動物紹介」より』
<http://www.nhdzoo.jp/animals.php?animal_sn=108030111&p=>
(2013/2/25 アクセス)

参考：「心的外傷後ストレス障害」『フリー百科事典 ウィキペディア
日本語版より』

<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BF%83%E7%9A%84%E5%A4%96%E5%82%B7%E5%BE%8C%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%AC%E3%82%B9%E9%9A%9C%E5%AE%B3>>
(2013/2/25 アクセス)

^ 作者紹介 v

一九六四年 静岡県静岡市生まれ

一九八六年 日本大学経済学部卒業

二〇〇九年 「第二十一回 日本動物児童文学賞」 奨励賞受賞

（作品名…ホツキョクグマと三角コーン）

二〇一二年 「第二十四回 日本動物児童文学賞」 奨励賞受賞

（作品名…ロッキーとクリーム）

二〇一二年 「平成二十四年度 静岡市民文芸児童文学部門」 奨励賞

受賞（作品名…月のおくりもの）

書名…『ロッキーとクリーム』

著者名…芦沢 美樹／作・絵

製作日…二〇一三年二月二十五日

発行者…芦沢 美樹

製作者…芦沢 美樹

email: info@sankakucone.com

Copyright(C) 2013 Miki Ashizawa All rights reserved

